

板倉聖宣著『歴史の見方・考え方』
(仮説社, 1986年)

家永 千裕, 伊藤 久徳, 小関 健司
須藤 宏子, 武田 清美, 矢吹 敬

『歴史の見方・考え方』(板倉聖宣著 仮説社 1986年)は、著者板倉氏が以前から提唱している「仮説実験授業」を歴史教育の分野にもあてはめていこうという試みの書である。「仮説実験授業」とは、ある問題に対する多様な予想、仮説をたて、それを事実とつき合わせていくといった授業形態であるが、これは理科教育において実施され、社会科でも地理教育でいくつか成功している。本書は、その「仮説実験授業」を、今度は歴史教育にも用いることが出来ないかという一つの提案を投げかけている。内容を検討する形でいくつかの問題点をあげてみたいと思う。

板倉氏が歴史にも「仮説実験授業」をあてはめられるのではと思った根拠として「自然科学と社会・人文科学とでは対象が大きく違っていても、その対象に関する法則性の発見を目的としていることには変わらない」という考え方をあげている。これは恐らく歴史と科学は、本源は同じであることを主張しようとしたのだろう。歴史と科学が目的を同一にしているという考え方は賛同できるが、著者のいう「対象に関する法則性の発見を目的にしている」という指摘はどうだろうか。

この意見によれば、氏は歴史には法則があるとみているようだが、その根拠はどこにあるのだろうか。もちろん本書は「歴史とは何か」を主題としているのではないので詳細に述べる必要はないが、やはり歴史の新しい方向づけをしようとするならば、自分の歴史観を明確に打ち出し、それに基づいた立論を行なってほしいところである。

さて本書は第一部・第二部に分かれている。第一部のテーマは「江戸時代の農民は何を食べていたか」である。氏は「食」という人間の最も基礎的な部分を抜きにした歴史は無意味だとして「仮説実験授業」の対象にこのテーマを選んでいる。

第一部での問題は「江戸時代の農民は平均して何を一番多く食べていたかを明らかにする」ことであるが、この問題に関し次の二点について意見を述べることにする。まず第一点は、「平均して」ということについてである。一口に江戸時代といっても270年間の長きにわたっており、その間には新田開発が盛んに行われた時代、行われなかった時代、あるいは生産力の向上など、

様々な歴史的背景の変遷があったはずである。またある一時期をとってみても地域差というものがあったことを考えなければならないだろう。そうした様々な条件、事例の違いを270年間という長さで、しかも日本全国というスケールの大ききで平均化することに意味があるのだろうか。かえって何も見えなくなってしまうのではないか。そうして求められた数値が事実には違いないにしても、個々の事例から完全に分離してしまっている数字であるから、事実としての重みが感じられなくなっている。

確かに今までの歴史の授業では、例外的な飢饉の時のことを取り上げることさらにそれを強調し、江戸時代の農民について暗いイメージばかりを生徒に植えつけるようなところがあったかもしれない。

しかしそういう特殊な場合にこそ本質的な面が表われることもあると思う。士農工商として武士に次ぐ身分とされながら、不作の時にしわ寄せを食わされたのはやはり農民だったのであり、こうした幕府の農民政策の本質は、例えば飢饉を題材とする中ではっきりと浮かび上がってくるのではないか。「平均化」の意味、「平均化」の結果がはたして本当の意味で事実といえるのか、大いに疑問が残るところである。

第二点は、第一点とも関連するが、そもそも「農民が何を食べていたか」という問題設定自体が、重要なことなのであろうかという疑問である。確かにこういった基本的な問題の解決を怠った上に成立する歴史の空虚さという意見には同意できるが、一体この問題提起は歴史上の何を明らかにするのか。考えてみれば農民は全人口の約九割を占めていたのであるから「全体として」みれば一番多く米を食べていたのは当たり前だということになる。もし全ての事例を「全体」の中に還元してしまうとすれば、この問題の解答は氏自身も述べているように「当たり前」のことしか出てこないだろう。そうなるとこの問題設定の意味は、一般に人々が持っている江戸時代の農民に対するイメージのごく一部分的な修正をするにとどまるだけではないだろうか。

このように第一部に対しては疑問に思う点が多かったのであるが、第二部「人口の変化を手がかりにして歴史を見る」では、数量的な面から歴史のダイナミズムが捕えられていてその観点に新鮮味が感じられた。

第二部で中心となる考え方は、物質は全て原子から構成されているという原理を、原子を人間に置かせて歴史にあてはめていくという原子論的な考え方である。氏は歴史を見るものさしとして人口問題をとりあげ、この視点から様々な事例を分析するが、興味深い展開であった。その理由として次の二点が指摘できる。まず一つには「比較」するための道具として統計が使われている点である。第一部では米の生産量、消費量などを全国一律に平均化していたが、第二部の人口についての分析では、日本を東と西に分けて地域差に注目し、西南諸国による明治維新の社会的

背景を明瞭に描き出している。このように一つの指標を設けてそれを基準に長期的な歴史の流れを捕え比較しようとする試みは、大いに参考とするところであった。

もう一点は、第一部と異なり疑問をはさむ余地のない史料、統計を使用している点である。第一部では、例えばある一つの藩のある年の史料をもとにして全体的な話を展開していくなどの無理が各所に見られるのに対して、第二部においては、佐渡金山、別子銅山といった日本を代表する鉱山の史料などを用い、さらに土木事業等の統計により、時代の変化をあとづけているため、うまく数量的な歴史像が構築されているのである。つまり第一部が、細かい指標を設けずに米の話だけで自己完結させているのに対し、第二部では時代の変化を捕えるための手がかりとして統計、史料を用いたところに説得力が生まれた理由があるといえよう。

最後に本書で述べられていることの前提となっている「勝手気ままな主観的な判断」で歴史を見ることと歴史教育との関連について述べておこう。

たしかに生徒にとって身近な題材を扱う授業は歴史への興味をかりたてるし、「仮説実験授業」方式は、自らを授業に参加させ真実の探求を行うという態度を培ってくれるだろう。だが歴史教育であるならそこから先が問題なのではないか。すなわちただ「本当はこうであった」という形で事実を明らかにするだけの授業であってよいのかということである。歴史に関係する者——特に教育者——は、ただ単に歴史的事実を明らかにするのではなく、事実に関係する者よりもより強く自分の価値観を加えて生徒の前に提起しなければいけないのではないか。何故なら歴史の授業とは、今日の社会をよりよく理解するためのものであり、究極的には他の社会科の科目との協調の上によりよい未来社会を作り上げてゆく人間を育てるためのものである。どうしてもそこにはよりよい社会とはいかなる社会なのかという価値判断が介在しているのである。

それは決して押しつけ或いは極端に偏ったものであってはならないが、「仮説実験授業」で得られるであろう、いわゆる「歴史の真実」をただ単に呈示していく授業よりも生徒の既得の知識や価値観に揺さぶりをかけることができ、その様な授業を行うことが歴史教育の本質ではなからうか。

最近、歴史を数量的にみる研究が盛んになりつつある。ややもすればデータだけをたくさん出すだけで終わってしまう傾向はないか。

事実を史料から引き出す手法としては、その科学的方法に一見の価値はあるが、どういう観点からその事集を扱うのかがはっきりしていなければそのデータは生きてこないだろう。

そうした意味もふくめて、本書は専門外の領域から投げられた一石であり、このような試みが歴史教育の活性化の一助となることに期待したい。

（筑波大学教育研究科社会科教育コース）